

化粧をはじめとする若者の電車内迷惑行為と個人差要因との関連性

化粧をはじめとする若者の電車内迷惑行為と 個人差要因との関連性

国際日本文化研究センター共同研究員／神戸国際大学非常勤講師 平 松 隆 円

Relationship between Factors of Individual Difference and University Students' Annoying Acts such as the Makeup in the Train

Ryuen HIRAMATSU, PhD.

Collaborate researcher, International Research Center for Japanese Studies
Adjunct Lecturer, Kobe International University

ABSTRACT

The purposes of this study was to clarify the relationship between engaging in and understand of annoying acts such as young people applying makeup, exclusively on trains, and to clarify their association with factors of individual difference such as social consideration, self-esteem, public self-consciousness, and private self-consciousness. From the results of questionnaire survey (55 male, $M=19.53$ years old, $SD=1.71$; 88 female, $M=19.15$ years old, $SD=1.28$), we learned that young people themselves were basically aware of the rudeness of actions generally considered "rude behavior," with the exceptions of "applying makeup" and "reading magazines and newspapers." Also, while they generally did not actually engage in those "annoying acts," it was not necessarily the case that their awareness of these behaviors being rude was related to their actual actions. While these were partial results, self-esteem and private self-consciousness were associated with engaging in annoying acts, while social consideration and public self-consciousness were associated with awareness of annoying acts.

Keywords: annoying act, train, social consideration, self-esteem, public self-consciousness, private self-consciousness, university student

要 旨

本研究の目的は、電車内に限定して、化粧をはじめとする若者の迷惑行為の実行と意識との関係をあきらかにするとともに、それらと社会考慮、自尊感情、公的自意識、私的自意識の各個人差要因との関連性をあきらかにすることである。男性55人（平均年齢=19.53歳、 $SD=1.71$ ）、女性88人（平均年齢=19.15歳、 $SD=1.28$ ）を対象とする質問紙調査の結果、「化粧」「新聞や雑誌などを読む」をのぞいて、おおむね一般的に迷惑行為とされている行動を若者自身も迷惑行為と意識していることがわかった。また、実際にそれら迷惑行為をおこなうことはあまりないこと、必ずしも迷惑行為と意識していることが実際の行動に関係しているわけではないことがわかった。部分的ではあるが、迷惑行為の実行には自尊感情や私的自意識が、迷惑行為の意識には社会考慮や公的自意識が関連していた。

キーワード：迷惑行為、電車、社会考慮、自尊感情、公的自意識、私的自意識

1. はじめに

不特定多数の人々が乗り合わせる電車内では、ささいな行動であっても、迷惑行為となることが少なくない。

大手民鉄16社で構成される日本民営鉄道協会(2011)による2011年の駅と電車内の迷惑行為ランキング調査によると、3年連続で「騒々しい会話・はしゃぎまわり等」が36.8%でトップであった。28.8%で3位の「携帯電話の着信音や通話」、27.0%で4位の「ヘッドホンからの音もれ」を含めると、音に関する行動が迷惑行為として上位となっていることがわかる。

ほかにも、「座席の座り方」が31.2%で2位であり、「乗降時のマナー」が25.1%で5位である。電車内の迷惑行為として、たびたびメディアに登場する「電車の床に座る」は18.8%で7位であり、「車内での化粧」は17.5%で8位であった。また近年、問題視されている「混雑した車内へのベビーカーを伴った乗車」は13.7%で11位と、けっして少なくない者が迷惑行為として認識している。

これまで迷惑行為に関する研究は、いくつかおこなわれている。

中村(2012)は、社会的迷惑行為に関する心理学的研究を概観し、社会的態度、自己制御、羞恥心、恥意識が社会的迷惑行為に影響する要因であることを示唆した。

中里・松井(2007)は、恥意識が自らを省みたときに感じる自分恥、自分の行動が社会一般の常識やルールと一致しないときに感じる他人恥、身近な仲間集団と自らの考えや行動とが一致しないときに感じる仲間恥からなることを指摘し、自分恥と他人恥が青少年の非行的態度を抑制する要因であることをあきらかにした。

中村(2010)は、自分恥と他人恥について検討し、社会的迷惑や逸脱行為に抑止的な影響を及ぼすこと、規範意識の低い集団への同一視が

高い場合には仲間恥が社会的迷惑行為や逸脱行為に対して、促進的に影響をすることをあきらかにした。

小池・吉田(2011)は、共感性や社会考慮と公共の場における迷惑行為との関連を検討し、社会考慮の高い者は、目の前に被害者となりうる人物が少なくても、社会に迷惑をかけることを好まない傾向があることをあきらかにした。また、共感性の高い者は、被害者が多い場合には迷惑行為を抑制するが、被害者が少ない場合には迷惑行為を実行すること、共感性の高い者が被害者の視点をとるとは限らず、別の他者の視点を取り迷惑行為を実行する場合があることをあきらかにした。

さらに小池・吉田(2012)は、共感性や社会考慮と公共の場における迷惑認知との関連を検討し、社会考慮の高い者は低い者に比べ、迷惑行為をより迷惑であると認知していることをあきらかにした。

谷(2010)は、公共場面における迷惑行為に対して喚起される罪悪感について、共感性、自意識がどのように関連しているか検討し、罪悪感への自意識の関連は認められなかったものの、共感性との関連をあきらかにした。

迷惑行為を、電車内に限定しておこなわれた研究もある。

北折(2008)は、電車内での迷惑行為に注目して検討をおこない、迷惑認知が無神経と感じることに影響していること、社会的考慮の高い者ほど迷惑行為を空気が読めない行為と評価する傾向が高いことをあきらかにした。

迷惑行為として指摘されている、人前での化粧に注目した研究もある。

平松(2007)は、公衆場面における化粧行動について検討し、若者にとって公衆場面とはその場面の対人接触の高低により構成されていること、化粧の入念度の高い場面では、公衆場面における化粧行動も高いことをあきらかにした。

また、平松（2010）は、男女とも不特定他者がいる比較的公的な場面で社会的にも化粧をしてよいと考えている者は、特定・不特定の他者の存在に関係なく化粧行動をおこなっていることをあきらかにした。

2. 問題の所在

人々は、社会や集団において行動や判断の基準である規範を共有している。しかしながらそれは、普遍的なものではなく、その社会固有の価値や行動様式を学習し経験することによって社会化され、獲得される。したがって、規範は社会や集団に固有であり、時代や文化によって変化する。平松（2009）があきらかにしているように、今日では迷惑行為として認識されている電車内における化粧行動が、1900年代前半にはそうではなかったことから理解できる。

また、ある社会への新規参入者が社会化されていなければ、規範を共有することができず、既存の者とのあいだでズレを生じさせ、特定の行動が迷惑行為となる。そのため、迷惑行為を検討するうえで、迷惑行為をおこなっている者とその行為を迷惑であると認知している者との比較検討は重要である。しかしながら、そのような研究はほとんどおこなわれてこなかった。

そこで本研究では、そのような比較研究に向けた予備的研究として、一般的に多くの迷惑行為の当事者として考えられている青年男女を対象に迷惑行為の検討をおこない、彼らの迷惑行為に関する意識と実態をあきらかにすることを目的とする。

今回の研究では迷惑行為がおこなわれる場面を電車内に限定する。迷惑行為は多様な社会的場面で起こりうる可能性があるものの、それゆえにいったいどのような場面でどのような行動が迷惑行為となり得るか、その範囲は広いものとなる。その社会場面に居合わせたことの経験

の有無によって、規範の獲得に偏りが考えられる。すなわち、航空機を利用したことがない者にとって、機内でのどのような行動が迷惑行為となるかといった規範が獲得されることは難しい。そのため、青年男女であれば複数回利用したことがある電車内に場面を限定することで、より詳細な検討を試みた。

3. 調査の概要

i) 調査方法、調査時期、調査対象者

2012年10月、関西に居住する大学生を対象に、質問紙調査をおこなった。倫理的配慮として、調査票に研究の目的を明記し、回答は任意であり、無記名で個人が特定されないことを説明した。

調査対象者は、男性55人（平均年齢=19.53歳、 $SD=1.71$ ）、女性88人（平均年齢=19.15歳、 $SD=1.28$ ）の合計143人（平均年齢=19.29歳、 $SD=1.47$ ）であった。

ii) 調査内容

1) 迷惑行為の実行と意識

日本民営鉄道協会（2011）による駅と電車内の迷惑行為ランキング調査の結果を参考に、迷惑行為項目を選定した。すなわち、「大声で話す」「携帯電話の通話」「イヤホンからの音もれ」「ゴミ・空き缶等の放置」「床に座る」「化粧（デオドラント・脂取り紙の使用・髪スタイリングなどを含む）」「喫煙」「飲食」「新聞や雑誌などを読む」「荷物を座席の上に置く」の10項目である。

それぞれの項目について、電車のなかで実際におこなったことがあるか（迷惑行為の実行）を「したことがない (1)」から「よくする (5)」までの5件法で回答を求めた。また、それを迷惑行為だともうか（迷惑行為の意識）を「おもわない (1)」から「おもう (5)」までの5件法で回答を求めた。

2) 社会考慮

社会考慮とは、個人の生活空間を社会として意識している程度や、複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度である。迷惑を認知するためには、周囲の他者や社会全体への影響を考慮する視点が必要であり、社会考慮が迷惑行為の促進や抑制に与える影響は小さくない。

本研究では、吉田ら (1999) の社会考慮尺度 13項目を用いて「あてはまらない (1)」から「あてはまる (5)」までの 5 件法で回答を求め、得点化をおこなった。

確認のため因子分析 (主因子法) をおこない、既存尺度と同じ 1 因子を得た ($\alpha=0.90$)。

3) 自尊感情

自尊感情とは、人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方のことであり、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことである。Taylor & Brown (1988) によれば、自尊感情の高い者は、他者に対して肯定的関心をもち、向社会的行動をとり、人間関係が良好であることがあきらかにされているなど、自己評価と社会的適応に関係性が認められている。

本研究では、Rosenberg (1965) により作成され、山本ら (1982) によって邦訳された自尊感情尺度 10項目を用いて「あてはまらない (1)」から「あてはまる (5)」までの 5 件法で回答を求め、得点化をおこなった。

確認のため因子分析 (主因子法) をおこない、既存尺度と同じ 1 因子を得た ($\alpha=0.80$)。

4) 自意識

自意識とは、自分自身への注意の向けやすさに関する性格特性である。自分の外見や他者に対する行動など、外からみえる自己の側面に対する注意を向ける程度の公的自意識、自分の内

面や気分など外からみえない自己の側面に注意を向ける程度の私的自意識からなる。朝日新聞 (2012) によると、迷惑行為の一つである電車内化粧に対して「電車内でものすごい顔で化粧をしている人をみると恥ずかしくないのかなと思う」「周りにどうみられているか気にならないのか」という意見が寄せられており、迷惑行為と自分自身への注意の向けやすさには何らの関係が予測される。

本研究では、菅原 (1984) の自意識尺度の 21 項目を用いて「あてはまらない (1)」から「あてはまる (5)」までの 5 件法で得点化をおこなった。

確認のため因子分析 (主因子法・Varimax 回転) をおこない、既存尺度と同じ 2 因子を得た。内的整合性の点から不適切な「世間体など気にならない」「人にみられていると、つい格好をつけてしまう」「自分自身の内面のことには、あまり関心がない」をのぞく 18 項目で得点化した (公的自意識: $\alpha=0.89$ 、私的自意識: $\alpha=0.86$)。

5) フェイス項目

年齢と性別を回答させた。

6) 統計処理

PASW Statistics 17.0を用いた。二者間の差の検定をおこなう場合、事前の手續として、Levene検定により等分散性を確認した。不等分散であった項目についてはAspin-Welchの t 検定をおこない、その他の項目についてはStudentの t 検定をおこなった。

4. 結果

1) 個人差要因の男女差

社会考慮、自尊感情、公的自意識、私的自意識の各個人差要因の男女差をあきらかにするた

めt検定をおこなったところ (Table 1)、自尊心について男性の方が女性に比べ有意に高いことがわかった。

2) 迷惑行為の実行の男女差

迷惑行為を実際におこなったことがあるかについて (Table 2)、男女ともほとんどおこなっていないことがわかった。そのなかでも、男女

とも「飲食」「新聞や雑誌などを読む」を相対的におこなったことがあることがわかった。

男女差をあきらかにするためt検定をおこなったところ、「ゴミ・空き缶等の放置」「床に座る」「化粧」で有意な男女差が認められ、「ゴミ・空き缶等の放置」「床に座る」は男性の方が女性に比べ、「化粧」は女性の方が男性に比べ、おこなったことがあることがわかった。

Table 1 個人差要因の男女差

	男性		女性		性差	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t値	有意水準
社会考慮	3.40	0.85	3.32	0.68	0.67	
自尊心	3.13	0.72	2.72	0.62	3.55	**
公的自意識	3.47	0.79	3.74	0.87	-1.82	
私的自意識	3.34	0.84	3.52	0.72	-1.35	

** $P < .01$

Table 2 迷惑行為の実行の男女差

	男性		女性		性差	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t値	有意水準
大声で話す	2.65	1.21	2.51	1.12	0.72	
携帯電話の通話	2.09	1.16	2.28	1.26	-0.92	
イヤホンからの音もれ	2.44	1.26	2.10	1.16	1.61	
ゴミ・空き缶等の放置	1.71	1.10	1.25	0.67	2.77	**
床に座る	1.82	1.25	1.36	0.71	2.46	*
化粧	1.38	0.78	2.42	1.45	-5.55	***
喫煙	1.33	0.88	1.14	0.53	1.45	
飲食	3.05	1.22	3.07	1.16	-0.07	
新聞や雑誌などを読む	2.96	1.51	3.02	1.49	-0.23	
荷物を座席の上に置く	2.40	1.27	2.36	1.28	0.17	

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

Table 3 迷惑行為の意識の男女差

	男性		女性		性差	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t値	有意水準
大声で話す	4.27	1.06	4.34	0.96	-0.40	
携帯電話の通話	3.95	1.34	4.15	1.03	-1.01	
イヤホンからの音もれ	3.75	1.31	4.09	1.11	-1.69	
ゴミ・空き缶等の放置	4.62	0.85	4.73	0.77	-0.79	
床に座る	4.18	1.23	4.49	1.10	-1.51	
化粧	3.30	1.45	2.90	1.32	1.68	
喫煙	4.81	0.52	4.80	0.75	0.17	
飲食	3.33	1.44	3.08	1.15	1.08	
新聞や雑誌などを読む	1.84	1.21	1.81	1.15	0.15	
荷物を座席の上に置く	3.89	1.21	3.77	1.24	0.56	

3) 迷惑行為の意識の男女差

迷惑行為の意識について (Table 3)、男女とも「化粧」「新聞や雑誌などを読む」をのぞいて、おおむね迷惑行為と意識していることがわかった。男性では「喫煙」を最も迷惑行為だと意識し、相対的に「大声で話す」「床に座る」「ゴミ・空き缶等の放置」を迷惑行為と意識していた。女性では「喫煙」を最も迷惑行為だと意識し、相対的に「大声で話す」「携帯電話の通話」「イヤホンからの音もれ」「ゴミ・空き缶等の放置」「床に座る」を迷惑行為と意識していた。

男女差をあきらかにするためt検定をおこなったところ、有意な項目は認められなかった。

4) 迷惑行為の実行と意識の相関関係

実際の迷惑行為の実行と意識との関連性を検討するために、男女別にPearsonの相関係数を算出した。

男性では (Table 4)、「大声で話す」を迷惑行為と意識している者ほど「大声で話す」「ゴミ・空き缶等の放置」「化粧」「喫煙」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「携帯電話の通話」を迷惑行為と意識している者ほど「ゴミ・空き缶等の放置」「床に座る」「喫煙」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「ゴミ・空き缶等の放置」を迷惑行為と意識している者ほど「喫煙」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「床に座る」を迷惑行為として意識している者ほど「床に座る」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「喫煙」を迷惑行為と意識している者ほど「ゴミ・空き缶等の放置」「化粧」「喫煙」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「新聞や雑誌などを読む」を迷惑行為と意識している者ほど「ゴミ・空き缶等の放置」「床に座る」「喫煙」をおこなっている傾向にあることがわかった。「荷物を座席の上に置く」を迷惑行為と意識している者ほど「荷物を座席の上に置く」をおこなっ

ていない傾向にあることがわかった。

女性では (Table 5)、「大声で話す」を迷惑行為と意識している者ほど「喫煙」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「携帯電話の通話」を迷惑行為と意識している者ほど「携帯電話の通話」「床に座る」「喫煙」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「ゴミ・空き缶等の放置」を迷惑行為と意識している者ほど「床に座る」「喫煙」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「化粧」を迷惑行為と意識している者ほど「化粧」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「喫煙」を迷惑行為と意識している者ほど「床に座る」「喫煙」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「飲食」を迷惑行為と意識している者ほど「飲食」「荷物を座席の上に置く」をおこなっていない傾向にあることがわかった。「荷物を座席の上に置く」を迷惑行為と意識している者ほど「荷物を座席の上に置く」をおこなっていない傾向にあることがわかった。

5) 迷惑行為の実行と個人と要因の分散分析

実際の迷惑行為が社会考慮、自尊感情、公的自意識、私的自意識の各個人差要因によって異なるかをあきらかにするため、各個人差要因の中央値に基づき、男女別にH群（高群）とL群（低群）にわけた。そして、迷惑行為の実行10項目を従属変数とし、各個人差要因のそれぞれに基づく高低2群を独立変数とする1要因の分散分析をおこなった。

男性では (Table 6)、自尊感情のH群はL群に比べ「携帯電話の通話」をおこない、「新聞や雑誌などを読む」をおこなっていないことがわかった。私的自意識のH群はL群に比べ「新聞や雑誌などを読む」をおこない、「イヤホンからの音もれ」「化粧」をおこなっていないことがわかった。

女性では (Table 7)、自尊感情のH群はL群

Table 4 迷惑行為の実行と意識の相関関係（男性）

	迷惑行為の実態									
	大声で話す	携帯電話の通話	イヤホンからの音もれ	ゴミ・空き缶等の放置	床に座る	化粧	喫煙	飲食	新聞や雑誌などを読む	荷物を座席の上に置く
迷惑行為の意識										
大声で話す	-0.27 *	-0.20	-0.01	-0.36 **	-0.02	-0.35 **	-0.43 **	-0.02	-0.04	0.18
携帯電話の通話	-0.25	-0.06	-0.13	-0.31 *	-0.35 **	-0.26	-0.42 **	-0.13	0.03	0.11
イヤホンからの音もれ	-0.21	0.04	-0.08	-0.18	-0.11	-0.18	-0.26	-0.12	-0.15	0.03
ゴミ・空き缶等の放置	0.07	-0.10	0.09	-0.20	-0.12	-0.20	-0.37 **	-0.10	0.08	0.08
床に座る	-0.16	-0.05	-0.03	-0.15	-0.35 **	-0.21	-0.23	-0.24	-0.03	-0.17
化粧	0.00	0.08	0.07	0.03	-0.08	-0.05	-0.16	-0.08	-0.02	-0.09
喫煙	-0.10	-0.12	-0.04	-0.46 **	-0.19	-0.34 *	-0.53 ***	0.14	0.19	-0.06
飲食	-0.18	0.12	-0.02	0.20	-0.14	-0.15	0.09	-0.23	0.15	-0.14
新聞や雑誌などを読む	-0.13	0.17	0.01	0.44 **	0.32 *	0.07	0.41 **	-0.19	-0.27	0.03
荷物を座席の上に置く	-0.01	0.03	0.04	-0.07	-0.09	-0.25	-0.05	-0.21	0.00	-0.37 **

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

Table 5 迷惑行為の実行と意識の相関関係（女性）

	迷惑行為の実態									
	大声で話す	携帯電話の通話	イヤホンからの音もれ	ゴミ・空き缶等の放置	床に座る	化粧	喫煙	飲食	新聞や雑誌などを読む	荷物を座席の上に置く
迷惑行為の意識										
大声で話す	-0.08	-0.04	0.00	-0.03	-0.07	0.01	-0.32 **	-0.20	-0.01	-0.19
携帯電話の通話	0.01	-0.28 **	-0.10	0.00	-0.31 **	-0.11	-0.33 **	-0.08	0.18	-0.14
イヤホンからの音もれ	0.11	0.06	0.10	0.06	-0.18	0.06	-0.16	-0.03	0.20	-0.16
ゴミ・空き缶等の放置	-0.02	-0.06	0.05	-0.13	-0.28 **	-0.01	-0.33 **	-0.04	0.15	-0.18
床に座る	0.06	0.04	0.07	-0.03	-0.27	0.07	-0.21	0.00	0.20	-0.10
化粧	-0.03	-0.13	0.08	-0.01	-0.13	-0.22 *	-0.05	-0.12	0.02	0.11
喫煙	0.02	-0.16	-0.04	-0.08	-0.42 ***	-0.19	-0.45 ***	0.00	0.13	-0.10
飲食	0.00	0.09	0.13	-0.09	-0.01	-0.03	-0.09	-0.25 *	-0.04	-0.22 *
新聞や雑誌などを読む	0.02	0.07	0.21	0.20	0.11	0.06	0.10	-0.07	-0.19	-0.06
荷物を座席の上に置く	-0.13	0.01	0.12	0.06	-0.11	0.06	-0.08	0.02	0.04	-0.43 ***

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

に比べ「飲食」をおこなっていないことがわかった。

6) 迷惑行為の意識と個人と要因の分散分析

迷惑行為の意識が社会考慮、自尊感情、公的自意識、私的自意識の各個人差要因によっていかに異なるかをあきらかにするため、各個人差要因の中央値に基づき、男女別にH群（高群）とL群（低群）にわけた。そして、迷惑行為の意識10項目を従属変数とし、各個人差要因のそれぞれに基づく高低2群を独立変数とする1要因の分散分析をおこなった。

男性では（Table 8）、公的自意識のH群はL群に比べ「荷物を座席の上に置く」を迷惑行為と意識していることがわかった。私的自意識のH群はL群に比べ「喫煙」を迷惑行為と意識していることがわかった。

女性では（Table 9）、社会考慮のH群はL群に比べ「床に座る」「荷物を座席の上に置く」を迷惑行為と意識していることがわかった。公的自意識のH群はL群に比べ「大声で話す」を迷惑行為と意識していることがわかった。

5. 考察

1) 迷惑行為の実行と意識

迷惑行為の実行について、そのほとんどでおこなっていないことがあきらかとなった。しかしながら、相対的に男女とも「新聞や雑誌などを読む」「飲食」についてはおこなっていた。

その理由として、今回の調査対象者が大学生であることから、コミック雑誌や教科書などを通学途中に読む機会が多いことが推測される。また、「飲食」という質問項目についてはキャンディー類からバーガー類のファストフード、またペットボトル飲料まで含まれる。そのため、どのような内容をイメージしたかによって回答に影響を与えた可能性がある。

迷惑行為の意識について、「新聞や雑誌などを読む」をのぞいて多くの項目で迷惑行為と意識していることがあきらかとなった。しかしながら、相対的に「化粧」「飲食」については、迷惑行為として意識していなかった。

電車内における化粧が迷惑行為であるということが、たびたび新聞などのメディアで取り上げられている。しかしながら、若者自身は迷惑行為だととらえていない。朝日新聞（2012）でも、3割以上の中学3年生が電車内化粧を認めるということが記事となっているが、若者自身が迷惑行為として意識していない以上、いくら電車内化粧が迷惑行為だと指摘したところで、その規範が形成されていないため行動を抑制することは難しいことが示唆された。

その一方で、「喫煙」については迷惑行為と意識していた。JR私鉄各社とも、1990年頃までは車内に灰皿が設置されており、喫煙が認められていた。その後、徐々に禁煙車両が増えていき、禁煙や分煙がすすんだが、1990年以降に生まれた今回の調査対象者にとって、車内における喫煙が迷惑行為であるとする規範は、社会化されていることがあきらかとなった。

2) 迷惑行為の実行と意識の関係性

男女とも「荷物を座席の上に置く」を迷惑行為と意識している者ほど「荷物を座席の上に置く」をおこなわないというように、特定の行動を迷惑行為と意識することで、それをおこなっていないという関係があきらかとなった。しかしながら、「携帯電話の通話」を迷惑行為と意識する者ほど、「床に座る」をおこなっていないという、意識と行動の直接的な関係以外もあきらかとなった。このことから、迷惑行為の抑制には、その行動に対する意識形成だけではなく、迷惑行為に対する網羅的な規範形成が必要であることが推測される。

また、男性のみで認められたが「新聞や雑誌

Table 6 迷惑行為の実行と個人差要因の分散分析 (男性: 平均値とF値)

		大声で話す	携帯電話 の通話	イヤホンからの 音もれ	ゴミ・空き缶 等の放置	床に座る	化粧	喫煙	飲食	新聞や雑誌 などを読む	荷物を座席 の上に置く
社会考慮	L 群	2.89	2.21	2.57	1.71	1.68	1.36	1.36	3.00	2.75	2.43
	H 群	2.44	2.00	2.28	1.64	1.96	1.36	1.20	3.20	3.28	2.40
	F 値	1.90	0.44	0.72	0.06	0.66	0.00	0.43	0.35	1.60	0.01
自尊感情	L 群	2.52	1.85	2.42	1.79	1.70	1.36	1.36	2.91	3.36	2.58
	H 群	2.95	2.50	2.60	1.50	2.00	1.40	1.20	3.25	2.40	2.15
	F 値	1.60	4.13 *	0.24	0.90	0.72	0.03	0.44	0.94	5.44 *	1.36
公的自意識	L 群	2.67	1.96	2.67	1.63	1.75	1.50	1.38	3.17	2.96	2.67
	H 群	2.56	2.04	2.15	1.70	1.70	1.26	1.15	3.00	3.22	2.26
	F 値	0.12	0.06	2.30	0.07	0.02	1.16	1.03	0.23	0.40	1.28
私的自意識	L 群	2.73	2.23	2.81	2.00	2.15	1.65	1.54	3.00	2.46	2.62
	H 群	2.61	1.89	2.04	1.46	1.54	1.14	1.14	3.07	3.36	2.25
	F 値	0.14	1.19	5.57 *	3.30	3.42	6.25 *	2.75	0.05	5.16 *	1.12

* $P < .05$

Table 7 迷惑行為の実行と個人差要因の分散分析 (女性: 平均値とF値)

		大声で話す	携帯電話 の通話	イヤホンからの 音もれ	ゴミ・空き缶 等の放置	床に座る	化粧	喫煙	飲食	新聞や雑誌 などを読む	荷物を座席 の上に置く
社会考慮	L 群	2.32	2.27	2.05	1.24	1.49	2.29	1.22	3.10	3.22	2.42
	H 群	2.69	2.19	2.14	1.24	1.21	2.57	1.07	2.86	2.76	2.29
	F 値	2.35	0.09	0.13	0.00	3.04	0.77	1.55	0.95	1.99	0.22
自尊感情	L 群	2.61	2.21	2.12	1.33	1.47	2.44	1.14	3.33	3.09	2.40
	H 群	2.45	2.38	2.10	1.18	1.28	2.43	1.08	2.80	2.90	2.38
	F 値	0.39	0.35	0.00	1.02	1.42	0.00	0.44	4.55 *	0.34	0.01
公的自意識	L 群	2.46	2.04	2.07	1.20	1.24	2.33	1.11	3.02	2.87	2.41
	H 群	2.53	2.50	2.11	1.33	1.50	2.53	1.19	3.00	3.06	2.28
	F 値	0.08	2.88	0.03	0.82	2.66	0.38	0.49	0.01	0.31	0.23
私的自意識	L 群	2.45	2.12	1.95	1.21	1.24	2.26	1.14	3.07	3.12	2.29
	H 群	2.55	2.43	2.23	1.30	1.48	2.65	1.15	2.90	2.75	2.53
	F 値	0.15	1.26	1.16	0.32	2.21	1.43	0.00	0.44	1.31	0.74

* $P < .05$

Table 8 迷惑行為への意識と個人差要因の分散分析 (男性: 平均値とF値)

		大声で話す	携帯電話 の通話	イヤホンからの 音もれ	ゴミ・空き缶 等の放置	床に座る	化粧	喫煙	飲食	新聞や雑誌 などを読む	荷物を座席 の上に置く
社会考慮	L 群	4.37	4.04	3.74	4.63	4.22	3.59	4.82	3.26	2.00	3.78
	H 群	4.36	4.08	3.96	4.76	4.24	3.08	4.96	3.52	1.56	4.20
	F 値	0.00	0.01	0.39	0.38	0.00	1.67	1.95	0.41	1.74	1.69
自尊感情	L 群	4.22	3.91	3.72	4.63	4.31	3.44	4.78	3.56	1.94	3.88
	H 群	4.45	4.15	3.95	4.80	4.10	3.20	4.95	3.15	1.60	4.05
	F 値	0.58	0.40	0.41	0.66	0.39	0.33	1.68	1.00	0.97	0.27
公的自意識	L 群	4.17	3.91	3.74	4.65	4.13	3.39	4.74	3.04	1.52	3.57
	H 群	4.48	4.11	3.89	4.74	4.33	3.30	4.96	3.70	1.89	4.26
	F 値	1.04	0.27	0.17	0.17	0.36	0.05	3.18	2.75	1.33	4.57 *
私的自意識	L 群	4.04	3.75	3.75	4.67	4.17	3.63	4.71	3.29	2.08	3.88
	H 群	4.54	4.18	3.86	4.71	4.29	3.04	4.96	3.39	1.57	4.00
	F 値	2.93	1.34	0.09	0.05	0.13	2.28	4.27 *	0.06	2.40	0.14

* $P < .05$

Table 9 迷惑行為への意識と個人差要因の分散分析 (女性: 平均値とF値)

		大声で話す	携帯電話 の通話	イヤホンからの 音もれ	ゴミ・空き缶 等の放置	床に座る	化粧	喫煙	飲食	新聞や雑誌 などを読む	荷物を座席 の上に置く
社会考慮	L 群	4.33	4.07	3.88	4.57	4.21	2.91	4.74	2.95	1.62	3.48
	H 群	4.36	4.19	4.26	4.86	4.71	2.86	4.83	3.14	2.02	4.02
	F 値	0.01	0.27	2.49	2.84	4.32 *	0.03	0.33	0.58	2.54	4.32 *
自尊感情	L 群	4.33	4.13	4.04	4.71	4.47	2.73	4.82	3.13	1.69	3.71
	H 群	4.43	4.20	4.15	4.78	4.50	3.03	4.75	3.00	1.93	3.78
	F 値	0.22	0.09	0.19	0.15	0.02	1.04	0.19	0.30	0.87	0.06
公的自意識	L 群	4.15	4.13	3.89	4.63	4.54	2.94	4.74	2.91	1.87	3.57
	H 群	4.60	4.11	4.30	4.81	4.35	2.76	4.84	3.22	1.62	4.03
	F 値	4.46 *	0.01	2.73	1.07	0.59	0.38	0.34	1.44	0.98	3.00
私的自意識	L 群	4.15	4.12	4.12	4.68	4.54	2.83	4.85	2.85	1.81	3.49
	H 群	4.52	4.12	4.07	4.74	4.38	2.98	4.71	3.29	1.83	4.00
	F 値	3.17	0.00	0.05	0.10	0.39	0.26	0.68	3.03	0.01	3.67

* $P < .05$

などを読む」を迷惑行為と意識する者ほど「ゴミ・空き缶等の放置」「床に座る」「喫煙」をおこなったという、正の相関関係があきらかとなった。今回の調査内容からは、その解釈が不可能であるため、今後詳細な検討が必要である。

3) 迷惑行為の実行と個人差要因の関連性

男女とも自尊感情と迷惑行為の実行とのあいだの関連性があきらかとなった。すなわち、自尊感情の高い者は低い者に比べ、男性では「新聞や雑誌などを読む」をおこなっておらず、女性では「飲食」をおこなっていなかった。これは、Taylor & Brown (1988) による、自尊感情の高い者は、向社会的行動をとるという指摘と一致する。また、自尊感情が高く自分を大切に思える者は逸脱な迷惑行為をおこなうことで自分自身を危機的な状況に追い込むようなことはしないのではないかと推測される。

しかしながら、男性では自尊感情の高い者は低い者に比べ「携帯電話の通話」をおこなっていた。今回の調査内容からは、その解釈が不可能であるため、今後詳細な検討が必要である。

さらに、男性のみ私的自意識と迷惑行為の実行とのあいだの関連性があきらかとなった。すなわち、私的自意識の高い者は低い者に比べ、「イヤホンからの音もれ」「化粧」をおこなわず、「新聞や雑誌などを読む」をおこなっていた。Scheir (1980) によると、私的自意識の高い者は、態度と行動との一貫性が高い。すなわち、ある行動を迷惑と意識できていれば、自分の行動に対しても迷惑行為をしないように心がけていることが影響していると推測される。

4) 迷惑行為の意識と個人差要因の関連性

男女とも公的自意識と迷惑行為の意識とのあいだの関連性があきらかとなった。すなわち、公的自意識の高い者は低い者に比べ、男性では「荷物を座席の上に置く」を迷惑行為と意識し、

女性では「大声で話す」を迷惑行為と意識していた。Froming & Carver (1981) によれば、公的自意識が高い者は、規範の影響による同調行動が強いことがあきらかにされており、他者からみられる自己を気にすることで、迷惑行為を迷惑と認知しやすいことが影響していると推測される。

また、女性のみ社会考慮と迷惑行為の意識とのあいだの関連性があきらかとなった。すなわち、社会考慮の高い者は低い者に比べ「床に座る」「荷物を座席の上に置く」を惑行為と意識していた。小池・吉田 (2011) (2012) によると、社会考慮の高い者は目の前に被害者となりうる人物が少なくても、社会に迷惑をかけることを好まない傾向があり、迷惑行為をより迷惑と認知している。本研究は、それを裏付けるものとなった。

6. 今後の課題

規範は、その社会に所属する成員が社会化されることによって成立する。そのため、電車内という特定の空間を日常的に利用する者かそうでない者かによって規範の形成に差が生じる。また、ひとくちに電車内といっても、都市近郊区間のような乗客数の多い路線や地元住民が利用する程度の地方路線などがある。それら路線によっても、規範は異なるであろう。

そのため今後は、鉄道利用経験の程度や利用路線網による比較検討が必要である。

【文献】

- 朝日新聞 (2012) 電車内化粧中 3 が考えた、11 月 4 日朝刊
- Froming, W. J., & Carver, C. S. (1981) Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm, *Journal of research in personality*, 15, 159-171
- 平松隆円 (2009) 化粧にみる日本文化、水曜社
- 平松隆円 (2010) 公衆場面での化粧行動への社会的是非と個人差要因の関連性、ファッションビジネス学会誌、15、33-42
- 北折充隆 (2008) 電車内の迷惑行為評価に関する検討：悪質行為はKYか?、金城学院大学論集人文科学編、5 (1)、16-26
- 小池はるか・吉田俊和 (2011) 共感性・社会考慮が公共の場における迷惑行為抑制に与える影響、高田短期大学紀要、29、1-6
- 小池はるか・吉田俊和 (2012) 共感性・社会考慮が公共の場における迷惑認知に与える影響、高田短期大学紀要、30、1-9
- 中村真 (2012) 「社会的迷惑行為」に関する研究の動向：社会的迷惑行為の内容および測定方法、迷惑行為に影響する心理的要因に着目して、江戸川大学紀要、22、79-89
- 中村真 (2010) 恥意識が社会的迷惑行為および社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影響：規範意識が低い仲間との不一致に起因する恥意識は社会的逸脱行為を促すのか、日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集、19、114
- 中里至正・松井洋 (2007) 「心のブレーキ」としての恥意識—問題の多い日本の若者たち、ブレーン出版
- 日本民営鉄道協会 (2011) 平成23 (2011) 年度駅と電車内の迷惑行為ランキング、<http://www.mintetsu.or.jp/activity/enquete/2011.html>
- Rosenberg, M. (1965) Society and the adolescent self-image, Princeton University Press
- Scheier, M. F. (1980) Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs., *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 514-521
- 菅原健介 (1984) 自意識尺度日本語版作成の試み、心理学研究、55、184-188
- 谷芳恵 (2010) 公共場面における迷惑行為に対する罪悪感—共感性、公的自己意識、私的自己意識との関連から—、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、3 (2)、21-26
- Taylor, S. E. & Brown, J. D. (1988) Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health, *Psychological Bulletin*, 103, 193-210
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面、教育心理学研究、30、64-68
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 (1999) 社会的迷惑に関する研究 (1)、名古屋大学教育学部紀要、46、53-73